



LA NOUVELLE

N°17

AUTOMNE

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者 藤倉洋一 (昭45)
2016.10.1 発行

第21回仏友会総会

4月23日(土)恒例の仏友会総会が東京・大手町サンケイプラザで開催された。出席者は、現役学生3名を含めて総勢59名の盛況であった。

藤倉会長の挨拶、金澤副会長の会務報告の後、会計・監査報告が承認された。今年は、2年に一度の幹事改選の年だったが、今回も藤倉会長以下、現在の布陣で継続することが承認された。ここで総会の部は終了し、続いて、川口先生から母校の近況報告をいただいた。

講演会の部では、原耕三氏(昭49)を講師に迎えて、『詭計の正体 ～ミステリーの発端は染井霊園の初恋～』との演題で1時間半ほどお話しいただいた。内容は、氏が松本清張『アムステルダム運河殺人事件』を土台に構想した小説『アムステルダムの詭計』が、昨秋見事に「福山ミステリー文学新人賞」(選者:島田荘司氏)を射止めたのを機に、そこに至った経緯を語っていただいたもの。学生時代の西ヶ原の思い出や、フェルメールに関する蘊蓄などを交えた、氏独特の飄々とした語り口に、会場はしばしば笑いに包まれた。

休憩の合間に、出席者一同が2グループに分かれての記念撮影(写真下)を行った。現役学生3名は、昨年秋の外語祭のフランス劇『美女と野獣』出演者代表の皆さん(La Belle 役原菜月さんら)。続く懇親会では、南仏産の赤白ワインのグラスを手に、参加者たちは仏友会伝統の和やかな雰囲気と会話を楽しんだ。

今回の講演内容に関連して、原耕三氏から原稿を頂戴したので、以下に掲載させていただく。(幹事 中村日出男 昭49)

ミステリーの遠景には、いつも西ヶ原キャンパスが……

原 耕三 (昭49)

★仏友会総会前後★

正直、講演会の依頼を受けたときは億劫だった。「まあ、本の宣伝になるかも」という淡い期待と、福山での表彰式の予行演習のつもりで受諾した。いざ登壇すると、時間配分を間違えた。ミステリーの醍醐味を伝えたくて「何故清張作品は繰り返し映像化されるのか」「刑事コロンボがヒットした理由」などのテーマを泣く泣くカットした。講演後大勢の同窓生に本を購入して頂き、久々に同窓愛を堪能した。後日、感想や著作内の事実誤認を指摘してくれる先輩もいた。

翌5月には広島県福山市まで出かけ、「福山ミステリー文学新人賞」の表彰式に参加した。受賞挨拶では「トークが関西弁で面白い」との反応を得た(本人は完璧な標準語の積りなので意外だった)。島田荘司氏と再会し「なかなか、本が売れないんですよ」



昭和45年卒までの出席者と現役学生



スクリーンを使用している講演会風景

と訴えると「私のデビュー作も売れず散々だった」と慰められ「本の売れ行きなど気にせず、次回作に集中的に取り組むように」と助言された。氏はサービス精神も旺盛で、同行した家内に「作中の女性画家は、奥さんがモデルでしょう」とヨイショしてくれた。これで家内はイチコロ。自作の油絵をデジカメに撮って氏に送付した。しばらくして氏から「素朴な美しい絵」との返信があった。私は「素朴と云うのは微妙な感想だなあ」と思うが、家内は「美しい」との文言だけリピートし、にたにた笑っている。根っから楽天的な性分なのだ。

最大の喜びは、福山から帰京後だった。「出版記念」を名目に西ヶ原時代の懐かしい顔ぶれが集まった。卒業後初めて再会する顔もある。F科に留まらず、クラブや当時の麻雀仲間まで輪が広がった。有り難いことに、本を読んでハガキやメールをくれる同窓生もいた。

★『アムステルダムの詭計』の評価、売れ行き★

仏友会での事前販売や雑誌「ジェイ・ノベル」に取り上げられ幸先は良かったのだが、初めて足を踏み入れる出版界は甘くなかった。「売りたい」作家と「読みたい」読者と、その間に「儲けたい」出版社、書店が介在する。それだけではない。名うての書評家(自称・他称)も跋扈し、それぞれの思惑でマーケットに参画する。読者は、移り気で他の読者や書評家の影響を受け易い。新人作家はリーチが短く、なかなか読者の手元まで届かないのもどかしいところ。残念ながらまだ初版に留まり、重版には至っていない。

実際に手に取って読んだ方々からは概ね好評を得たが、手放しで称賛という訳でもない。一部の読者の戸惑いは、作品の位置づけにあるようだ。作者としては、面白さテンコ盛りになりたい故に様々な要素を組み込んだ。そのため作品範疇の整理に困難を覚える読者もいる。(本格ミステリーVS社会派推理小説、ミステリーVS青春ストーリー、フィクションVSノンフィクション、美術史ミステリーVS昭和戦後史ストーリー)『アムステルダムの詭計』はミステリー小説なのだが、書店によっては美術棚、歴史棚に置かれているらしい。

ただ、幸いなことにNETでのレビューでは高評価が多い。ま



昭和46年以降の出席者と現役学生

た地元福山のFMラジオ局のインタビュアーから絶賛を受けたことで売り上げが伸びベストテンにも入った。読者からのリアクションは無上の喜びだ。

★人生の不思議(ミステリー)★

西ヶ原キャンパスを巣立って以降の会社員生活は、ため息が出る程に起伏の乏しいものだった。例外的に非凡な出来事は、オランダ駐在中の罹患である。当時の私は、脂の乗った47歳の航空会社駐在員だった。精密検査のあと、オランダ医師の囁んで含めるような「ガン」通告に茫然自失した。病室で独りになると、突如襲われた不運に声を荒げ悪態をついた(汚い日本語で)。罹病とは無縁の妄想に耽ることで、心細さや転移・再発の恐怖と対抗しようとした。昭和40年にアムステルダムの運河で殺害された日本人駐在員の「トランク・ミステリー」は頭に残っていた。事件を題材にした松本清張氏の著作も覚えている。平凡な人間が、荒んだ心を抱え殺意を抱くに至る心情を思い遣った。妄想のどのシーンにも、遠景にあるのは西ヶ原キャンパスだった。それだけ外語時代の思い出は、その後の人生に強烈ななごりを残したということだろう。

帰国後、全日空の羽田空港勤務を最後に60歳で定年退職した。会社員生活を振り返ると、真っ先に甦るのはアムステルダムの病棟で抱いた妄想だった。その記憶を核として、清張作品やフェルメールの贋作事件を絡めて妄想を再構成する作業は楽しかった。妄想に輪をかけたのが『アムステルダムの詭計』である。幸運なことに本作は島田荘司氏の推薦を受けミステリー新人賞を頂いた。

誰にとっても人生の節目となる不運や幸運は、予想もしていない時に発生するものらしい。危機を忘れ慢心し油断していると、前触れなく不運に襲われ悲哀に沈むことになる。また努力は報われる筈と胸弾ませて待ち構えていても、やすやすと歓喜は訪れない。努力のあと汗が写いて、忘れてしまった頃降りてくるものようだ。人生は不思議なミステリーに満ちている。

★遠景の西ヶ原キャンパス★

老境に差し掛かった私たち夫婦の最大の関心事は健康問題だ。ウォーキングに精を出すのを日課にしている。途上の河原で急に無口になる(と家内が指摘する)。妄想に耽っている時だろう。妄想の中から次回のミステリー・ネタ(サラリーマン・ミステリー)を考えている。どのシーンにも必ず、背景に西ヶ原キャンパスが浮かぶ。

第22回サロン仏友会のお知らせ 《講演とボジョレ・ヌヴオを楽しむ》

日時: 2016年11月19日(土) 午後2時~5時
会場: 本郷サテライト 3F・7F
会費: 3,000円

2016年分通信費(1,000円)も同時に受け付けます。

《講演》 午後2時~3時15分

講師: 泉 登茂子氏(昭49)

日本公認会計士協会千葉会 副会長

演題: 「コスモポリタン登茂子流生き方」

~ Aix-en-Provence から始まった

“湧く湧く”人生~

外語を卒業して公認会計士?人生には曲がり角がいくつもあるものですが、何がきっかけになるのか?泉さんの場合、多くの人と交流することで、生きる手段や考え方を身につけ、聞いているだけで楽しくなるようなワクワク人生を送ってこられたようです。



時代を先取りして、しっかり前へ歩みを進めてこられた氏の道程を語っていただきます。

《ワイン・パーティ》 午後3時半~5時

個別通知: 10月半ばまでに、メルアド登録の会員にはE-mailで、その他の登録会員には往復はがきでご案内します。申し込み切は11月10日。

連絡先: 藤倉洋一(昭45)

fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp

Tel/Fax 048-822-4540

勝亦杏子(昭46)

anzuko@k08.itscom.net



《内海和夫さんの死を悼む》

仏友会会長 藤倉洋一(昭45)

5月の下旬、本会報誌の印刷をお願いしている松本印刷社の松本社長と電話している際、仏友会幹事の内海和夫さんが5月9日に亡くなっていたことを知らされました。故人の遺志で家族葬にされたとのことでした(享年66歳)。

内海さんは、長年肝臓を患っており、入退院を繰り返していましたが、事業も、2年半前に松本印刷社さんへ譲渡されていました。昨年の仏友会総会には出席されましたが、同年5月11日の幹事会に出席されたのが最後となりました。

故人は、外語大を2回(昭和49年ベトナム語科、昭和54年フランス語科)卒業されており、その内海さんを初めて仏友会に誘ったのは渡辺昌俊元仏友会会長です。渡辺さんによると、故人は渡辺さんの知己主宰のベトナムの学会で、日頃の研究テーマ「ベトナムの反仏独立運動と日本の支援」を発表され、ハノイや日本の新聞でも報道されたことがあったとのことでした。

仏友会にとって内海さんの最大の貢献は、2006年に田島先

生追悼文集『LE TEMPS PASSE...』を出版した際、編集委員として活躍され、印刷・製本を一手に引き受けて頂いたことでした。また、2008年に仏友会会報誌LA NOUVELLEを創刊できたのも、内海さんのご協力があったからこそです。さらに、仏友会の枠を超えて、東京外語会の会報委員としてご活躍され、印刷・製本を請け負っていたこともあります。

内海さんは仏友会幹事会の中で最古参でしたが、物静かで穏やかな性格で、誠実に取り組んでおられ、ピンポイントで貴重なご意見を述べておられました。衷心より感謝申し上げます。

安らかに眠りになりますように、心からご冥福をお祈りいたします。合掌。

仏友会幹事会は今春の総会で、さらに2年現体制で運営を継続することを皆さんよりご承認いただきました。今般、内海さんを欠くことになりましたが、残った幹事が力を合わせて、仏友会をさらに充実したものになりたいと考えておりますので、会員の皆様の暖かいご支援をお願い申し上げます。

(6月11日記)

